

「朝鮮半島南部の移住漁村『日本村』に関する調査研究」

基盤研究A (課題番号 19201054 研究代表 崔吉城)

ニュース・レター No. 1

2007年8月1日 発行
751-8503 下関市一ノ宮学園町 2-1
東亜大学 (崔研究室 0832-57-5179)

日本植民地と文化変容の研究



崔吉城

私は1968年韓国全国民俗総合調査団の一員として全羅南道巨文島の「日本村」の旧遊郭であった旅館に泊まったことがある。そこは韓国の伝統的な村ではなく、日本村にいたような異様な感じがした。1980年代半ば日本研究者として日本植民地研究のためにこの島を再訪問したとき、ある住民から日本語の手紙を読んでくれといわれ、読んでみると終戦直後に預けた家屋の賃貸料金を送って欲しいという内容であったので私はびっくりした。そして私はその手紙を契機に敗戦後日本人の韓国からの引揚に関心を持つようになり、それが縁になって山口県豊浦郡をしばしば訪ねることになった。



巨文島の奉安殿

巨文島を開拓して1915年に朝鮮水産王として表彰された木村忠太郎の子孫に当たる方を親族訪問のように訪ねているうち偶然にも私は中部大学、つづいて広島大学に移り、また2004年東亜大学の客員教授、翌年からは専任教授として奉職するようになった。2007年から3年間文部科学省及び日本学術振興会科学研究助成費をいただいて日本植民地に関する研究を始めている。



釜山での研究会
2007年6月2日

植民地は20世紀初め、アフリカなどほとんど世界的な普遍的な現象であった。日本の植民地もその一であった。そしてそれはほとんど終戦と共に終わったが植民地の影響は後期植民地 postcolonial においても残っている。植民地史は過ぎた過去ではなく、戦後の関係に影響するのである。

日本は近隣諸国、つまり台湾、樺太、朝鮮、満州などを植民地化し、広く東南アジアまで拡大して占領し、大東亜共栄圏を構築しようとし、失敗した。韓国の反日感情は時の流れによって自然に濃度をうすめていくものとは思われない。それはむしろ再生産され、国家や民族にダイナミックに影響していることが窺われる。大雑把に言って日本植民地とされた地域において戦後、その宗主国であった日本に対する態度が異なっている。



引揚港の仙崎港の現在

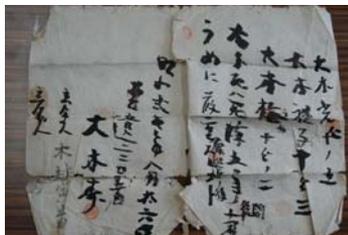


河崎威氏の資料提供

時:2007年7月14日

18-21時

場:プラザホテル下関



遺書

「麗水を懐かしむ」談話会

大木信夫、河崎威、林和男、植田清香、兵頭信子の諸氏の証言

西日本の山口、広島、福岡などには戦前、朝鮮半島などに住んで引揚げた人が多い。彼らは特に外国で敗戦を迎え、辛い体験をしている。しかし、彼らの多くは当地を懐かしむ。それは人類普遍的な感情かもしれない。しかし「懐かしむ」ことが植民地自体を懐かしむかのように誤解され、彼らの発言が注目されることはなかったが、本調査では彼らに注目し、移住、定着、引揚、再定着などの過程をリアルに描くところから始める。

河崎威氏は1932年7月27日朝鮮半島麗水で生まれ育って18歳で下関の水産業界に入り、水産人として現在、下関水産物買受人組合員、社団法人下関水産振興協会副会長のほかに、下関市連合自治会長、下関市社会福祉協議会副会長など数多くの要職を歴任した。彼は麗水を生まれ故郷として懐かしんでいる。

大木信夫氏は『朝鮮海峡』(文芸社、2001)の著者であり、千葉から来られた。彼の父親は麗水の裁判官であって、病気で帰還が困難、そして遺書を残して(写真)自決し、リヤカーで運ばれ焼かれた。著者はジャンク船上の飢餓状況で人間の品格を失うこと、緊迫な状況において朝鮮人の金山との信頼関係の強さ、日本で朝鮮人としていじめられたことなど問題点を多く出した。



鈴木文子

「引揚者のライフヒストリー分析にみる在朝日本人社会」

オーラルヒストリーは文献研究に対する補完的な意味もあるが、本研究では植民地において「支配」「強制」に対する生活実感を中心にする。インタビューの重要な項目は①渡朝の要因、②入植地、③内地への往来、④日本人と朝鮮人の乖離、⑤

食事、⑥文化的摩擦、⑦経済的差、⑧引揚られた時の状況である。既に調査した事例の紹介があって調査の実感が湧いてきた。この研究では文字文化 written culture と話し文化 oral culture の調和を図っていくのが妙味であろう。



「日本統治下の朝鮮漁業」



藤井賢二

韓国側は日本統治期において日本人が経営する「遠洋漁業」と朝鮮人の沿岸漁業の格差があったと批判しているが、日本側は朝鮮総督府がむしろ動力船を持たない零細な朝鮮人沿岸漁業者を保護育成したと主張したと、相反する見解を紹介した。国家レベルでの見解差が民間の差と整合するのだろうか、これから民間レベルでの調査を深めていこうとしている。



この写真は、麗水の中央にある大通りを海側から撮影している。当時の町並復原図と比較すると、左端は「ふじや旅館」（成田）、その右側の洋館造りの「山川書店」、中央の高台にある朝鮮風の建物は「鎮南館」である。このほかに制服姿の二人（学生か軍人か）をはじめ行きかう人や自転車、荷車、ポストなどが写っていて、日本人町の風景が浮かびあがる。（写真提供：成田信夫）

受贈図書
資料集発行

平和祈念事業特別基金『引揚者が語り継ぐ労苦』平成6の他42冊、
No.1「麗水邑十年史」 No.2「麗水日本人町の略図」（河井勇氏作成）

<新刊案内> 1



崔吉城・原田環共編
『植民地の朝鮮と台湾』
第一書房、2007

本書は台湾と朝鮮を対照して編集されたものである。しかし直接比較には至っていないものもある。したがって読者が比較しながら読むことが期待されている。戦後韓国では植民地が絶対悪としている。その意味ではイギリス、フランス、オランダなども悪の軸であろうか。植民地歴史を国際的な視野から比較していこうとするのがこの本の出版の本音である。

「朝鮮引揚者と韓国」（藤井賢二）、台湾東海岸における漢人・アミ漁民と沖縄漁民の接触」（西村一之）、「植民地朝鮮における日本語教育の近代的側面」（山田寛人）、「台湾総督府の『種族』・言語認識」（富田哲）、「『放送教本初等国語講座』に見る『国語』教育」（上田崇仁）、「台湾庶民地支配にみる計間の資料的価値に関する一試論」（上水流久彦）、「神社参拝反対と殉教」（グレーソン）、「台湾で神として祀られた日本兵」（山路勝彦）、「植民地朝鮮におけるキリスト教」（崔吉城）、「植民地における日本仏教による台湾地域への布教」（松金公正）、「井上角五郎・今泉秀太郎の甲申政変遭難記」（原田環）、「大正期の在日ヒーロー」（鄭大均）

<新刊案内> 2



広島朝鮮史セミナー事務局編
『梶山季之を偲んで』、2007

県立広島大学の原田環教授が長い間研究会を営んできた報告書の『梶山季之を偲んで』（広島朝鮮史セミナー事務局編）が届いた。児玉正昭の「広島とハワイ移民」と木村健二の「広島と朝鮮移民」が並んで目を引く。児玉氏は移民 immigration とは植民 colony でもなく、国内への移住でもないと定義しているが、木村氏はその反対に近く、主に植民地期に朝鮮半島から日本へ移住 migration を扱っている。昔植民地学として有名な矢内原忠雄は植民 colony とは政治的背後をもって移住することといっても当事者はその意識がない場合が多いので植民を「移民」と定義した。児玉が移民を「外国へ移住」といっても、植民地帝国の圏内での移住を移民というか国内移住というかの区切りが簡単ではない。本科研では価値中立的に移住 migration ということばを使う。

研究組織

研究代表

研究分担者

研究協力者

崔吉城（東亜大学教授・広島大学名誉教授）

原田環（県立広島大学教授）、木村健二（下関市立大学教授）鈴木文子（仏教大学教授）、櫛田宏治（東亜大学教授）、上田崇仁（徳島大学准教授）、磯永和貴（東亜大学准教授）、竹本正壽（東亜大学准教授）

上原雅文（東亜大学教授）、藤井賢二（姫路市立姫路高校教諭）、山田寛人（広島大学非常勤講師）、李文雄（ソウル大学校名誉教授）、呂博東（啓明大学校教授）、崔仁宅（東亜大学校教授）、徐恵卿（全州大学校教授）、張龍傑（慶南大学校副教授）、崔錫栄（公州大学校非常勤講師）、李良姫（霊山大学校教授）、鄭鴻基（フリーレンサ）